

『新編立川市史 通史編』執筆要領(案)

刊行して一定期間経った後(一〜二年程度)、インターネットで公開する予定です。

体裁について

版型

※B5サイズ・縦書き、2段組みとする。

※文字数は、本文ポイント(後述)を基準として、27字×19行×2段(1026字)とする。

※版面は、高さ215_ミ×幅137_ミとする。

※小口には編ごとにインデックスをつけ、「第一部」をつける。

※柱には章タイトル(右ページ)、節タイトル(左ページ)をつける。

ページ構成

各巻に巻頭カラーを設ける

原則として、見開きごとに、図、写真、表をつける。

全ページフルカラーとする。

編目構成

部、章、節、項、吊り見出しとする。

見出し

部 「第一部 先史」(中扉、太字22ポイント、3行取り、段落背景紫・文字色は紙の色と同じ)

※部番号は、上巻・下巻ごとの通し番号とする。

『新編立川市史 通史編 上』『第一部 先史』『第二部 古代・中世』『第三部 近世』

『新編立川市史 通史編 下』『第一部 近代』『第二部 現代』

章 「第三章 縄文社会の成熟 縄文時代後半(中期・後期・晩期)」

※(2行取り・段抜き、17ポイント、括弧書きは14ポイント)

※章が変わるごとに改ページ(偶数・奇数ページを問わない)

中扉は半扉とし、章を始める。

※段落背景色をつけることで、節や本文との区別を分かりやすくする。

節 「第三節 向郷遺跡の環状集落と集団墓」(原則1行、14ポイント、括弧書きは12ポイント)

※節は変わると改ページ

項 「1 宇津木台D環状集落の構造」(2行取り、12ポイント)

※項番号は、一桁は全角、二桁は半角

※章番号・項番号は一字下げ。番号とタイトルの間は全角1文字あけ。

※章・節のタイトルは可能な限り1行に収める（項は20字をめど）。最大でも2行とする（副題込み）。副題は――で囲み、原則強制改行する。

※項タイトルは1行に収める（項は20字をめど）。

吊り見出し
10.5 ポイント

本文
10.5 ポイント（括弧書きは9.5ポイント）、行間10.5ポイント

※派生として吊り見出し付き本文あり。吊り見出しのフォントは見出しに使うフォントと同じとする。

箇条書き ①、②、③を使う

※ポイントは本文と同じ。

※行頭一字下げ。①と文の間は半角あけ。2行以上の場合は文頭揃え。

史料の引用

※文中に組み込む場合は「」で括弧。

※段落として扱う場合は、全体を2文字分下げる

注 原則として注は付けない

※用語解説ページを設ける可能性はあり。

挿図キャプション 8 ポイント（括弧書きは7ポイント）（中央揃え）

※番号は、部番号・部内での通し番号とする

図 1・1

※本文中に複数の挿図番号を記載するときは、（図 1・3・図 1・4）などとする。

※数字は半角。「」は全角。

※挿図は原則としてページ左側上段を基準位置とする。

※挿図とキャプションは半文字（1文字分）あけ

※挿図右側と本文は1行（2（3文字分）あけ、挿図キャプションと本文は3文字分あけ

挿図中の文字 7 ポイントないし5 ポイント

※洋数字はコンデンス書体を使用

表キャプション 8 ポイント（括弧書きは7ポイント）（均等配置最終行左寄せ）

※番号は、部番号・部内での通し番号とする

表 1・1

※数字は半角。「・」は全角。

※表は原則としてページ左側上段を基準位置とする。

※表とキャプションは半文字＋1文字分あけ

※表右側と本文は1行（2～3文字分）あけ、表下側と本文は3文字分あけ

表組文字 8 ポイント

※洋数字はコンデンス書体を使用

キャプションに付随する説明文 8 ポイント（括弧書きは7 ポイント）

引用・参考文献表記 10 ポイント・行間 5 ポイント

※引用・参考文献の名称は可能な限り本文に書きこむこととする。

※本文に書きこむ引用・参考文献名は括弧で括り、割注方式とする。

※本文に書きこむ引用・参考文献名の記入項目は次の通りとする。

筆者名（原則として姓）、発表年次、論文タイトルないし章タイトルないし書名

論文タイトル・章タイトル・書名は主タイトルのみとし、サブタイトルは省略する

【記入例】

● 小林謙一 二〇〇四『縄紋社会研究の新視点 ―炭素 14 年代測定の利用―』 六一書房

↓ 小林二〇〇四『縄紋社会研究の新視点』

● テイケイトレード株式会社編 二〇一五『丸山B遺跡 ―井の頭丸山B遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書（第3次本発掘調査）―』（三鷹市埋蔵文化財調査報告第38集）武蔵野市・東京都都市づくり公社・鉄建・武蔵野トランスポート建設共同企業体

↓ テイケイトレード株式会社編二〇一五『丸山B遺跡』

● 谷口康浩 二〇〇一『環状集落の空間構成』『縄文時代集落研究の現段階』（第1回研究集会発表要旨）縄文時代文化研究会編 縄文時代文化研究会

↓ 谷口二〇〇一『環状集落の空間構成』

● 平本嘉助 一九七二『縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化』『人類学雑誌』八〇・三 日本人類学会

↓ 平本一九七二『縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化』

※部ごとに巻末にまとめる（本文中に記した参考文献名も含む）。

※ページは記入しない【ただし、校正作業に備え、原稿には該当ページを記すほうが望まし

い】

※同じ著者が同一年内に発表した別の成果を使用する場合は、a b cをつけて区別する。(安孫子二〇二三 a・二〇二三 b)

巻末における記入例

【書籍】

小林謙一 二〇〇四『縄紋社会研究の新視点 ―炭素14年代測定の利用―』六一書房

【報告書等】

テイケイトレード株式会社編 二〇一五『丸山B遺跡 ―井の頭丸山B遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書(第3次本発掘調査)―』(三鷹市埋蔵文化財調査報告第38集) 武蔵野市・東京都都市づくり公社・鉄建・武蔵野トランスポート建設共同企業体

【書籍の章】

藤田富士夫 一九九九「縄文尺はなぜ使われた」『最新 縄文学の世界』小林達夫編 朝日新聞社

谷口康浩 二〇〇一「環状集落の空間構成」『縄文時代集落研究の現段階』(第1回研究会発表要旨) 縄文時代文化研究会編 縄文時代文化研究会

安孫子昭二 二〇二三「第6章第3節 向郷遺跡3・a区 第26地点」『新編立川市史資料編 先史』立川市史編さん先史部会編 立川市

【雑誌掲載論文】

平本嘉助 一九七二「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」『人類学雑誌』八〇・三 日本人類学会

桐原 健 一九七四「鍋を被せる葬風」『信濃』[第3次]二九六 信濃史学会

※雑誌の通巻表記・巻号表記は、慣例に従う

出典一覧表記 10ポイント・行間5ポイント

※出典はキャプションには書き込まない。

※部ごとに巻末にまとめる

表記について

数字表記

原則、漢数字を使用する。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇

二一三年前

五〇〇〇年前

一万五〇〇〇年前

一・五倍、〇・三五倍
※小数点は「・」を使う
※十は使用しない。

年月日表記

明暦三年（一六五七）一月一八〜二〇日
享保二十一年（一七三六）
昭和二〇年（一九四五）八月十五日
享保年間（一七一六〜一七三六）※上二桁は省略しない
明治時代（一八六八〜一九一二）、大正時代（一九一二〜一九二六）、昭和時代、平成時代
※元号は、近世までは「年間」、近代以降は「時代」とする
※元号をさらにまとめるときは「時代」とする。平安時代、鎌倉時代、江戸時代
※西暦併記は、見開き内で最初に出てきた元号につける。
※元号の切り替わり年の表記方法
元文元年（一七三六）、・・・歴史時代は原則として元年優先
明治四五／大正元年（一九一二）、・・・月日により決定。

下巻における年次表記は西暦を優先させる可能性あり。

一九四五（昭和二〇）年

英数字表記

※資料編史料番号のほか、遺構番号や軍用機など、英数表記が妥当な場合に使用。原則半角とする。ただし、固有名詞の場合は全角。
※4文字までは原則として縦中横とする。

加曽利E式、NTT、JR東日本、B 29

向郷遺跡第26地点SE103、多摩ニュータウンNo.107遺跡

単位表記

※原則としてカタカナ表記とするが、単位記号（Km, g など）が妥当な場合は単位記号も可とする。

※キロメートル、キログラム、センチメートル、ミリメートルは、文意によりキロ、センチ、ミリと省略可

六キロメートル、〇・三五メートル、五・四センチメートル、ミリメートル

一〇・四キログラム、グラム

一〇〇平方メートル

一〇〇ヘクタール、一〇〇アール

パーセンテージ表記

60%、39.5%

※数字は半角とする。「%」は全角とする。

※小数点は一桁まで。ただし、可能な限り小数点以下は四捨五入 (JIS Z 8401 規則 B) する。

漢字・ひらがな等の表記基準

立川市施策シート表記等見直しの考え方、共同通信記者ハンドブック第13版以上
校正時、最終的に立川市の表記規則に従うこともある。

資料編出典の場合の表記

『先史』表6・10、第6・120図 (挿図・表・写真番号を記載)

『近世1』一・133 (章番号 (漢数字)・史料番号 (半角洋数字) とする)

『現代1』432 (全頁通し番号のため史料番号 (半角洋数字) のみ)

『柴崎の民俗』三二〇頁 (ページを参照するときは該当ページを記載する)

※『近世1』の「1」は全角

奥付

編集 立川市史編さん委員会編

発行 立川市